
グリム・リーパー

将軍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グリム・リーパー

【Nコード】

N8628N

【作者名】

將軍

【あらすじ】

街で噂される『怪力少年』。

その正体は、とある高校生『ゴット』こと
烈火信人。

プロローグ

くなあ、最近流行ってる噂知ってる？>

『さあ・・・？』

<実は私知ってるんだ。>

(なに、知ってんの？)

<それはですね・・・>

インターネットで行き
来する様々な噂、その多くは、いわゆる『都市伝説』して、片付け
られる。

しかし、この時、とある掲示板に書き込まれた『噂』は『現実』に
存在した。

<怪力少年で聞いたことありません？>

『いや・・・ない。』

(こっちも・・・)

<ええ！そうなんですか(驚)>

<最近、けっこう話題になってますよ>

(怪力少年って、マッチョな少年てこと?それなら別に珍しくないじゃん?)

<いや、それが違うんですよ。>

『? どういう事ですか?』

<ほら3月に暴力団の抗争があつたでしょ。<

<あの時、現場で信じられないものをみたんです。>

<30人以上の暴力団を1人の少年が壊滅させたんです。>

『・・・・・・はあ?』

(すご・・・・ブドーの達人ってやつ?)

<いや、そんなんじゃないです。>

<別にマッチョじゃないし。殴り方も我流な感じでした。>

<でも、その一撃で・・・・レスラーみたいな奴をぶっ飛ばしたんですよ!>

『ぶっ飛したって……』

『どういう意味です?』

<具体的にいうと、殴られたレスラー男が20メートルぐらい後方までぶっ飛ばれます。>

『……』

(……)

<多分、みんな信じてないでしょう?>

<でも、多分みなさんも見る事があると思います>

<だって彼は『実在』するんですから。>

龍さんは部屋をでました。

『行っちゃいましたね』

(ほんとか、分らんけど、会えたら殴りとばす。手合わせしたいもんです。)

『格闘技やってんですか?』

(空手を。)

『へーえ。楽しみにしてます。会えたら報告頼みます。』

『それじゃ』

(さよなら)

SARINさんが部屋を出ました

ボスさんが部屋をでました

彼等はいらない、自分達が噂する当人が同じ掲示板を見てため息をついていることを。

「都市伝説になってるんだ、僕。」

少年は苦笑いする

「しかも龍さん、本当は見えてないでしょ。」

彼、烈火信人はすでにいない『龍さん』の間違いを指摘する。

「正確には、30メートルだよ。飛ばしたの」

かれにとってはこれが常識。だが、それは他者からすれば『噂』か『都市伝説』としか捉えられない。確かに実在するのに。

「それでも、いい。」

信人はいまではそう思う。

「どんなことがあっても、僕は自分の信念に従っただけなんだから」

彼等が噂する都市伝説の正体は、どこにでもいる、普通の高校生だ

ったのである。

第1話（前書き）

ここから話が始まります……が、初っ端から『とある方』の要請で

主人公でないキャラの話を載せることになってしまいました（涙）

いやいや、話をむちやくちやにしかねないキャラが暴れまくって、ほんとにこの先大丈夫かな……なんて思う今日この頃です。

というわけで、ここからグリム・リーパーがほんかくてきにスタートします。

素人でいたらぬことがたくさんありますが、よろしく願います
！！

第1話

「どうなっただよ?・・・」男は目の前の惨状を信じられない思いで見ている。

彼は俗に『暴力団』と呼ばれる組織の構成員の1人である。

今回、準構成員となっている若者たち、はっきり言っでござるつきたち・・・の度重なる訴えを受けて、構成員5人で構成される『突撃隊』が目標の少年の確保に向かったのだ。

はっきり言っで、楽に済む事案のはずだった、目標の少年はまだ高校生。

いままで、町の様々な暴力団、新興勢力である中国マフィア、地元ギャングなどと抗争を繰り返してきた彼等にとって、この事案はまさしく朝飯前のはずだったのだ。

「それが、この有様。いったい何が起きたんだ?」男は突撃隊ではない。彼は『本部』から派遣された『偵察員』の一人だ。

突撃隊からの連絡が途絶えてから一時間、しびれを切らした本部は状況確認のために彼を出したのだが・・・

「こんなの本部の人間も想像しなかっただろうな・・・」男は苦笑する。

「まさか、建物の壁に『めり込ませる』とはな。」5人の構成員たちは口をそろえて

目標の少年に殴られる、あるいは蹴られた途端、すさまじい勢いで飛ばされたと話して気を失った。

「まったく、アクション映画じゃあるまいし。とんだやつが現れたもんだ。」

再び苦笑した男は、ふと真剣な表情になる。

「このままだと町の勢力バランスが崩れる可能性がある。少年は意識してないだろうが……。」 「下手すれば、来年にも抗争が再開されるかもしれない。」

男の杞憂は正しかった。

ただ、間違いがあつたとすれば、その時期を読み違えたことだろう。なぜなら、その時期はもうまじかにせまっていたのだから。

「おお、おひさしぶりでございますでございます。涼さん。」男・橘涼山は聞き覚えのある声に後ろを振り返った。

「ジェロニモ……あんた、何しに来た？」ジェロニモと呼ばれた男は昔の中国役人が着るような中華服をを纏った中年男だ。中華帽をかぶり、丸眼鏡をかけたその風貌は、どちらかと言えば中国ネタの芸人に思えるほどだ。

だが、彼が所属するのは裏の組織。涼山と同じなのだ。

「いやいや、わたくしは別に邪魔しに来たわけではないのでございますよ？少し挨拶に参っただけでございます。」 不可解な表情になる涼山を見ながらジェロニモは続けて涼山にとって衝撃的な一言を放つ。

「じつは、わたくし。昨日付けで首領ドンになつたのでございます。」 「！！」涼山にとっては寝耳に水の話だった。確かにジェロニモは中国マフィア『赤龍会』の実力者の一人だが、他にも 首領の跡継ぎ候補は大勢いる。

それになにより、まだ赤龍会首領は存命なうえに健康そのものだったはずだ。

だとすると、この世界の人間が考えることは1つ。

「手前、自分ところのボスを殺ったのか。」涼山の声に殺気が含まれる。

仲間殺しは暴力団の間では禁句中の禁句なのだ。

「いやいや、人聞きの悪いことを言わないでほしいでございます。」涼山の放つ殺気をどこ行く風と流したジェロニモはその場を完全に戦場に変える一言を放った。

「あなたがたとつるんで、未成年へのクスリの販売していた首領のことを、ただ・・・見捨てただけでございますよ。」

「てめえ！！ぶっ殺したる！」完全に切れた状態の涼山が放つ拳を軽く下がつてよけるジェロニモ。

「全く、仕方がないでございますね。」ため息をつきながらジェロニモは涼山を見つめなおした。

「我々マフィアに『暴力団』のおきてなど適応されないのでございますよ？」

一瞬で戦場が変わった路地裏で、冷たく、はたから見れば微妙に間の抜けた戦いが始まるうとしていた。

「仕方がないでございますね。手早く済まさせていただきますでございます。」

その言葉が闘いの号砲となった。

最初の一撃を下がってかわしたしたジェロニモだったが、続いて繰り出された回し蹴りはかわしきれなかった。

「ウツ?!」だがうめき声をあげたのは涼山の方だった。

なぜなら、自らが全力で放った回し蹴りはジェロニモの顔の横に出された左手に防がれていたのだ。

「言っただけです。」ジェロニモは涼山の右足をそつと握った。

「手早く済ませていただきますと。」次の瞬間、ジェロニモの中でどんな力が働いたのか・・・彼は涼山の右足を『上向き』にへし折った。

「ぐわあああ!?!」激痛に叫び声をあげ倒れこんだ涼山にジェロニモは手を伸ばした。

「?・・・」相手の意図が分らず、それでも警戒して身構える涼山にジェロニモは『笑いかけた』。

「さあ、しっかりしてください。わたくしは困ってる方にちゃんと理由があれば誰でも助ける主義なのでございます。」ジェロニモは涼山の手をつかみ、彼の体を無理やり上に引き上げる。

「いま、麻酔を打ちますでございます。すぐ、右足の痛みは引くはずでございますよ。」

涼山は理解できなかった、ジェロニモはやろうと思えば身動きがで

きない彼を一撃で

絶命させることができるはずだ。だが、敢えてそれをせず、それどころか、自分を手当てするジェロ二モの心情を涼山は理解できなかった。

「わたくしがあなたを治療するのが信じられないのでございますか？」ジェロ二モは涼山を睨みつけるわけでもなくただ見ている。それは数分前に見た瞳となんら変わっていない。そこが余計に不気味に思える涼山だった。

「あんた……. とういう神経してんだよ。クスリの件もそうだ・
・俺たち裏の人間が

正義のヒーローになれるわけないだろうが。」麻酔が効いてきたのろろ。途切れ途切れながらもあざける涼山にジェロ二モは少し悲しげな色を瞳に浮かべた。

「確かに、その通りでございます。卑怯者の世界に生きる私たちは正義のヒーロー

にはなれません。ですが…….

「それでも『善』であろうと抗うことはいけないことなのでございますか？」

それがジェロ二モの疑問。

「裏の人間だから、卑怯者の世界にいるから、必ず悪にならなければならぬなんて

きまりは存在しないのでございます。」

それがジェロ二モの信念。

「わたしは『公平な善』になりたいのでございます。どんな立場の者相手でも

弱者を守り、強者を打つ。そんな存在を目指しているのです。すよ。」

それがジェロニモの力。

「涼さん。あなたは今、わたくしに倒されました。倒されたあなたは今は『弱者』でございます。だから、わたくしはあなたをお助けしますし、守りますでございます。」

そこでいったん言葉を切るジェロニモ。

「ただしあなたが、わたくしをまた狙うなら、あなたを『強者』とみなして今度こそ殺しますでございます。2度狙った相手を私は許せないのです。」

「あと、あなたに1つ忠告しますでございます。あなたの所の組『藩龍組』でしたでしょうか。あそこにはもう戻らない方がよいと思いますでございますよ。」

「なんだと・・・?」

「いまごろ我々の『攻撃隊』が、市内15か所の事務所を襲撃しているはずでございます。」

理由はもう分つておいででございますね?」

思わぬ事実には愕然とする涼山にジェロニモはとどめとなる言葉を放つ。

「あなたに帰る場所はなくなったということでございます。さて、あなたはどうしますでございますか。貴女をここに招いた少年に感

謝して堅気になるか。それとも別の組織に入りなおして再起を図るか。」

ジェロニモはわかっていたこの男はおそらくそのどちらの選択肢も選ばないことを。

「俺が仕えるのはオヤジだけだ。」涼山は壁に背を預けながら唇をかむ。

「そして俺の目の前にはオヤジを殺ろうとする敵がいる。これを見逃す手はねえよな？」涼山の右手が腰に伸びる

「これで手前ごと！地獄に旅立ってやらあー！」彼が手にしたのは拳銃。

俗に言う45口径拳銃『ブローニング』だ。

彼が腰から拳銃を取り出すのに1秒弱、続けて相手に向け引き金を引くのに2秒弱

そして目の目にいるジェロニモに当たるのが3秒後。普通ならそうなるはずだった。だがジェロニモには銃弾が『当たらなかった』。

正確にはジェロニモに当たらずそれていった。

「な！・・・」驚きにかたまった涼山の正面にジェロニモが立つ。「言ったはずでございます・・・2度狙った相手をわたくしは許すことができない・・・と。」そのままジェロニモは涼山を蹴り飛ばした。

そのまま、1メートルほど吹っ飛んで路地に飛び出す涼山。そこにジェロニモのとどめの

一撃が繰り出された。

「八徑！」右手を掌底の形にして繰り出された一撃は信じられないことに涼山を軽く

20メートルは吹き飛ばし、店のショーウィンドーに突っ込ませた。

「やれやれ、やりすぎたでございますね・・・後であやまっておか

ないといけないうございます。「ジェロニモはその場に背を向けた。すでに頭から涼山のことは消え去っている。

「全くあの少年のおかげで、急にやりやすくなったでございます。抗争が。」ジェロニモは苦笑しつつ中華服のポケットから携帯電話をとりだす。

10月の冷え切った夜の闇にジェロニモの声が響く「攻撃対諸君。今こそ闘いの火蓋を切るときでございます。全力で我らが『善』を阻む存在を殲滅するのです！」

なお、この時一部始終を目撃していた通りすがりの高校生によって『怪力中年中華男』のうわさが生まれたことをジェロニモは知る由もない。

第2話 （前書き）

なんだかんだで、ごたごたしましたが……
ようやく主人公の話に入ります！

今回は『怪力中華男』には介入させないのでご安心を……と言
いたいところなんです。

一度登場させてしまった上に、衝撃的な？登場の仕方をさせてしま
ったせいで、難しくなっています。

第2話

「ふああああ……眠い……」少年の朝は、毎日この一言で始まる。

巷で噂の都市伝説『怪力少年』の当人である彼の名は烈火信仁。やたらと威勢の良い名前だが、その名前と対比して信仁の容姿は別段、武道派系でもなければイケメンでもない。

要するに別段特徴のない『普通』の顔立ちをしているわけだ。ただ、特徴といえば決定的な特徴が1つある。彼はいかにも日本的な顔立ちをしていながら、『金髪』なのだ。

そうになると親が外国人というはなしになるのだが、それは信仁自身わからない。なぜなら彼は

『孤児』だからだ。ある日、今暮らしている孤児院『あすか荘』の前にはだかのままポンと置かれていたのだ。

「（子供を裸で放置していくってどうよ？）」と今でも思う信仁だが、10何年もたつと不思議なことに『両親がいない生活』というのを自然に受け入れてしまっていた。

「（いまじゃ、逆に両親がいる環境が『不自然』に思えちゃうほどだもんな……）」それがおかしいとは理解しているものの、いまさら直そうとも思わない。なぜなら、今の自分の周りの環境に信仁は満足しているからだ。

「おはよう！信仁。」2階にある自分の部屋をでる信仁。この孤児

院では珍しいことに1人1部屋の個室が割り当てられている。1階の食堂に降りてきた信仁に元気な声が浴びせかける。

「おはよう。相変わらず美紀は早起きだね。」「ていうか、むしろ信仁が遅いのよ。おかげであんた、いつも1人で学校に登校してるじゃん。」信仁に声を浴びせたのは西枝美紀。彼と同じく孤児で、同じ年の少女である。

「毎回いつてるけどさ、別にそれはどうでもいいんだよ。て言うか朝はあんまり他人とかかわりたくないから遅くいつてるだけだし・・・」「そんなんだから信仁、あんまり友達できないんじゃないか・・・」。来年から高校生なのにどうすんのよ?」「いや別に僕は今の状況に満足してるし、美紀がいるじゃん。」信仁の切り返しに美紀は思わずぶばばと飲んでいたお茶を吹き出した。

「あんたね!そういう口といていると誤解される発言はやめなさいよ!」顔を真っ赤にして怒る美紀に信仁は冷静に答える。

「ひとつ言わせてもらうけど、今みたいな反応が原因で誤解されてんじゃないの?」信仁に言われて

周りを眺める美紀。いつの間に周りにいた職員や子供たちの視線が二人に集中している。

『やつぱり、美紀さんて信仁に惚れてんじゃない?』『あいつ金髪だからな』『美紀さんは美人だからな・・・くそ』信仁には絶対高嶺の花だろ!』というような声が聞こえるような聞こえないような。

そんな状況を認識した美紀は、顔を真っ赤にしたまま信仁の横を通って部屋に向かう。ただし通りざまにこんな言葉を残した「ササツと着替えて、いつものところで飯食おう?ここじゃ居づらい・・・」

それから10分後、着替えを済ました（中学の制服を着た）信仁と美紀はまだほとんど学生がいない大通りを2人きりで歩いている。傍^{はた}から見れば朝からカップルが歩いているように見えるかもしれないが、別段2人の間にそういう関係があるわけではない、あえていうなら片方（美紀）が片思いしているだけだ。

「毎回、こうやって朝抜け出すのは結構なだけだよ・・・なんで『あの店』で毎回食べるわけ？」

信仁が『あの店』とよぶのは2人が中学に入ってから朝飯と昼飯を食べている食堂変わりにしている店だ。別にそれ自体はとつくの昔に院長が許可を出しているので問題はないのだが・・・

「別にいいじゃない！あそこが武器屋でもご飯ただでおこってもらえるんだから構わないでしょ！」そう2人が食堂代わりにしている店は、この市内では知る人ぞ知る『武器屋さん』なのだ。

「よう！相変わらず早いな。お前さんたちは。」店に入るとすでに朝飯の用意は整っていたらしくうまさうなにおいが漂っている。「今日の朝飯は・・・って朝からステーキ！！」信仁の驚きの声を

軽く無視した店主は美紀にはもう少し小ぶりのステーキを載せた腹を差し出した。

「美紀ちゃんは、食べ過ぎると太るからこの程度にしておくよ。」店長は美紀が女性だからと配慮してくれているつもりらしいが、美紀には店長の『配慮』というのが正しいかは判別しきれない。

美紀から見れば『少し大きい』と感じるものを『小ぶり』と表している時点で信仁に配らたステーキがどの程度の大きさかわかるだろう。

「ぐえええ！もう食べれない・・・頼むから残させて・・・」
馬鹿野郎！男なら気合いで食って見せろ！人ん家でご馳走になつて
るんだから残さず食いやがれ！」「もがもがもが・・・こうなり
やあ

38計逃げるにしかづつてね・・・逃げるぞ美紀！」「了解！」

「なにい！！美紀ちゃんまで逃げるか・・・許さん！」店長が店の
奥から出てきたのは黒光りする機関銃^{エアガン}

「朝飯は残すな！！！！」店長の乱射音とともに2人の1日も始ま
っていく。

第3話

「はあ……」信仁は一人で、帰りを急いでいた。

今日は彼にとって、最悪の1日だった。

武器屋に追いかけて回され、裏道を通って慎重に來たため遅れた2人は、学校で学年主任、担任の2人に2時間にかけて説教された。

信仁と美記からすれば他の生徒への見せしめのような気がしないでもないのだが……

「そんな事、口が裂けても言えないしな……」ところで、彼にとって今日が最悪の1日になったのにはこれだけが理由ではない。

「美記の奴……手伝いを理由に逃げやがって……」
因みに、孤児院で美記が手伝いをするのは今日ではない。

「はあ……もう少し静かで優しい女の子がいたなら。」美記が聴いたら殴りかかってきそうな言葉を吐きながら歩いて行く信仁。

その先に、あまりにも突然に彼にとっての『非日常』が現れた。

「あれ？なんで美記が倒れてるわけ？！」

彼の目に映った光景は、一言で表すと『髪の毛の長い少女が道の真ん中に倒れている』というものだっただけ。

奇遇にも、美記の髪の毛を長く腰ぐらいまである。さらに倒れている少女はきている服もなぜか似た感じの学生服なのだ。

信仁が勘違いするのも仕方なかった。

この事は、少女にとっては幸運だった。だが信仁にとっては今日一番の不幸な出来事の始まりとなった。

「おやおや、そこにいやがったのか。」いやな声、妙な圧迫感を感じさせる声。

「気を失っているようだな。じつに好都合だ。」信仁は気付いたその圧迫感がそこしれぬ悪意であることを。

「対象者を発見。民間人が同行。所定の作戦に従い対象の確保を優先。目撃者は処分する。」処分という言葉に身構える信仁。その言葉が何を表しているかは明白だ。

「少年、運が悪かったな。」全身黒一色で固めている男は信仁を真正面から見据えた。

「てめえに何の恨みもないが、ここでは素直にあの世に行け。」男の言葉と同時に左右の裏道から黒づくめの男たちが飛び出す。その手には警棒らしきものが握られている。

「消せ。」たった一言、単純で簡潔な号令のもと男たちは信仁に襲いかかった。その動きには一切のためらいもない。ためらうべき相手とは認識していないからだ。

ドン！！という音とともに信仁の顔が血で染まった。だがその血は信仁の血ではない。

「あなた方がだれかは知りませんが……女の子に手を出すほど卑怯なだつてのは分かりました。」

「この子は美紀じゃないけど。女の子だ。」正面に迫った男の口から吹き出した血で顔を染めた信仁は

男たちを睨みつける。

「卑怯者の身勝手で、命をなくすのはごめんです！」男たちは動揺していた。すぐ片は付く。そう判断した彼らのほとんどはすでに背を向けて立ち去ろうとしていたのだ。そして背後から聞こえた音で仕事は終わつたと判断した。しかし、改めて考えてみればおかしい、警棒で殴つた程度ではあんな音は出ない。

「僕は、持ちたくてこんな力持つているわけじゃありません。ただ……力を持ったからにはそれに責任を持つべきだと信じてます……だから、悪いけどここであなた方を蹴散らせてもらいます！」
信仁が握りしめた右腕が容赦なく男の腹に叩き込まれる、その瞬間男たちは見た、殴られた男が宙を舞い
30メートル吹き飛ばされるのを。

「さあ、次ぎに飛びたいのは誰ですか？」なんの感情も感じられない普通の声。だが男たちは声を聞かなくても信仁の感情は分かっていた。なぜなら信仁の眼が、男たちを見据える目がかつと見開かれていたからだ。人間がそう長い間目を開け続けることはあり得ない。必ず瞬きをするものなのだ。だが、信仁はそれをしなかった。

男たちはその日初めて実在する『非現実の怪物』をみた。

第5話

美記が聴いたら殴りかかってきそうな言葉を吐きながら歩いて行く信仁。

その先に、あまりにも突然に彼にとっての『非日常』が現れた。

「あれ？なんで美記が倒れてるわけ？！」

彼の目に映った光景は、一言で表すと『髪の毛の長い少女が道の真ん中に倒れている』というものだった。

奇遇にも、美記の髪の毛を長く腰ぐらいまである。さらに倒れている少女はきている服もなぜか似た感じの学生服なのだ。信仁が勘違いするのも仕方なかった。

この事は、少女にとっては幸運だった。だが信仁にとっては今日一番の不幸な出来事の始まりとなった。

「おやおや、そこにいやがったのか。」いやな声、妙な圧迫感を感じさせる声。

「気を失っているようだな。じつに好都合だ。」信仁は気付いたその圧迫感がそこしれぬ悪意であることを。

「対象者を発見。民間人が同行。所定の作戦に従い対象の確保を優先。目撃者は処分する。」処分という言葉に身構える信仁。その言葉が何を表しているかは明白だ。

「少年、運が悪かったな。」全身黒一色で固めている男は信仁を真

正面から見据えた。

「てめえに何の恨みもないが、ここでは素直にあの世に行け。」男の言葉と同時に左右の裏道から黒づくめの男たちが飛び出す。その手には警棒らしきものが握られている。

「消せ。」 たった一言、単純で簡潔な号令のもと男たちは信仁に襲いかかった。その動きには一切のためらいもない。ためらうべき相手とは認識していないからだ。

ドン！！という音とともに信仁の顔が血で染まった。だがその血は信仁の血ではない。

「あなた方がだれかは知りませんが・・・女の子に手を出すほど卑怯なだつてのは分かりました。」

「この子は美紀じゃないけど。女の子だ。」正面に迫った男の口から吹き出した血で顔を染めた信仁は男たちを睨みつける。

「卑怯者の身勝手で、命をなくすのはごめんです！」男たちは動揺していた。すぐ片は付く。そう判断した彼らのほとんどはすでに背を向けて立ち去ろうとしていたのだ。そして背後から聞こえた音で仕事は終わったと判断した。しかし、改めて考えてみればおかしい、警棒で殴った程度ではあんな音は出ない。

「僕は、持ちたくてこんな力持っているわけじゃありません。けど・・・力を持ったからにはそれに責任を持つべきだと信じてます・・・だから、悪いけどここであなた方を蹴散らさせてもらいます！！」

信仁が握りしめた右腕が容赦なく男の腹に叩き込まれる、その瞬間男たちは見た、殴られた男が宙を舞い30メートル吹き飛ばされるのを。

「さあ、次ぎに飛びたいのは誰ですか？」なんの感情も感じられない

い普通の声。だが男たちは声を聞かなくても信仁の感情は分かっていた。なぜなら信仁の眼が、男たちを見据える目がかつと見開かれていたからだ。人間がそう長い間目を開け続けることはあり得ない。必ず瞬きをするものなのだ。だが、信仁はそれをしなかった。

男たちはその日初めて実在する『非現実の怪物』をみた。

第4話（前書き）

間違えて、第5話はおかしくなっています。

すいませんが、飛ばしてください。

第4話

「馬鹿な・・・」男たちの一人はうめいた。

目の前の見た目には、平均以下の体力しかなさそうな少年の拳が振るわれるたびに

仲間たちが宙を舞う。

まるで自分たちがテレビゲームの世界にいるようにさえ感じてしまう。

自分たちは序盤で簡単にやられる雑魚キャラで、少年は主人公キャラ。そんな考えが浮かぶほど戦闘は一方的な展開となっていた。

「く・・・そ・・・ガキ・・・！」地に伏した男の血を吐くような言葉を信仁は軽く受け流す「あなたたちが、始めたんでしょう？責められるいわれなんかないですよ。」

「グフ！！」信仁が放った横蹴りを食らった男がまた1人真横に3メートルほど吹きとぶ。

「くそが！てめえいつたいなにもんだ？武道の達人か何かか？」別の男の問いに信仁は薄く笑う。「なんか、そんな風に言ってる人もいたよな・・・でも違うね。」「じゃあ、いつたい・・・」信仁が拳を握りなおす「教える必要、ありますか？」振るわれた信仁の拳を間一髪で交わした男は、腰から拳銃を取り出した。

「！！」あわてて身を引いた信仁に男は拳銃を向ける。「悪いなクソガキ。てめえが何モンか知らんが、目標を阻む存在はすべて敵とみなす。」男の指が引き金に向かう。

「じゃあな！化け物！」信仁は銃を避けるかのように体をそらした、しかし、この至近距離で銃弾を避けられるはずもない。消音器でも

つけているのだろう、空気が漏れるような音と共に、鉛の銃弾が信仁の体に直撃した。ぐらりと信仁の体が揺れる。男は背を向けた。これでこの地獄も終わり、怪物は二度と起き上がらない、そう確信していた。

だから・・・背後で『聞こえるはず』の音が聞こえないことにすぐ気付いた。

疑念と共に後ろを振り返った男は、その眼に映った光景が信じられなかった。

「なぜだ？なぜ貴様は立っていられる！」信仁は立っていた。確かに銃弾の直撃を受け、男の先ほどの視界の中で信仁の体は衝撃を伝えるように揺れていた、それでも信仁はたおれてはいなかったのだ。

「なに、簡単なことですよ。」信仁は右手で腹を押さえながら話し出した「僕は自分の体に不思議な力を纏うイメージをすることによって、この力を発揮することができんです。」右手を腹から離す信仁、そこには直撃の跡はあっても血は出ていない。

「腕に纏うようイメージすれば必殺の一撃を。足に纏うようイメージすれば必殺の蹴りを。といった具合にこの力をばくは扱うんです。基本この2つしか僕は使えないんですけど。」信仁は、男の顔を見つめなおす。

「応用技として、この力を防御に使うこともできます。ぼくの前に力でできた盾をイメージすることで物理的な攻撃の威力を弱めたりね。」「それじゃあ、貴様が弾を喰らっても立てたのは・・・」
「そう、透明な盾、僕は『インビシブル・バリアー』と呼んでいるけどそれを展開させたからですよ。」

「ほう・・・つまり貴様は超能力の持ち主ってわけか・・・こりゃあ、願ってもない幸運だぜ。」突然男たちの背後から声が聞こえた。信仁はそちらに視線を向ける。黒服の男たちの間から現れたのはこれまた黒服のただし、輝くような銀髪の男だった。

年のころは30ぐらいだろうか、貌にいくつか切り傷があり、精悍な顔立ちをしている。

「ぼうず。俺の部下たち相手に退屈させちまってすまなかったな。

超能力者相手に一般人が闘うのは失礼なのは承知しているが、なにしろ知らなかったもんでな。」「リーダー、ここで騒げば付近の住民に我々の存在が露見してしまいます。リーダー自身が出なくても・・・」

部下の言葉を銀髪男は鼻で笑った。「すでに感ずかれておるわ。今更何を言ってやがる！」銀髪男は信仁の方に向き直る。「ぼうず、俺は敵と向かう時、名を名乗らんようにしている。なぜならば、俺と対等に戦える奴などほとんどいないんでな。そんな奴ら相手に名乗る必要性を感じられないからだ。」「だが、今こそ名乗りを上げよう。『禍風風伯』これが俺の名だ！」銀髪男、いや禍風の口元が歪む。笑っているのだ。

「今の言葉の意味はわかるよな？」禍風の右手がたたく掲げられる。「お前を全力で、俺はつぶす。つまり貴様の人生はジ・エンドってことさ！」振り下ろされた禍風の右手から鋭さを持った『風』が放たれる。

「まさか?!」信仁の口から驚嘆の声が漏れる。

「そうさ。俺も貴様と同じ超能力者だ!」

放たれた風は、信仁に一直線に向かっていく。「さあ、どこまで持ちこたえられる東洋の超能力者!」信仁が巻き込まれた非日常の世

界は容赦なく彼をさらなる戦いに引きずり込んでいくのだった。

第5話

「さあて・・・どこまでももつかないかな？東洋の超能力者！」禍風の右手から放たれた風の刃

は信仁に一直線に進んでいく。

「インビシブル・バリアー！」信仁が両手を前に掲げそう叫んだ瞬間、風は信仁に直撃した。「ぐわあああ！！」叫び声と共に信仁の体が軽く5メートルは吹き飛ばす。

「ふん・・・なるほど力は本物のようだな。」禍風はおのれの両腕に新たな風の刃を生み出しながら、信仁を見た。

「『吹き飛ばされた』ということは、何かの力が攻撃をある程度防いだということだな。その反発で飛んだのなら納得がいく。だが・・・」
「禍風の口元が歪む、笑っているのだ。」

「少年、貴様の力により作りだされた盾は相手の攻撃を『弱める』
と言っていたが、それは間違いだ。俺は自分の力の強弱がすぐにわかる。だからこそ言えることだが貴様のその盾は相手の攻撃によるダメージを『半減』するようだ。」信仁は地面に倒れながら男の話に耳を傾けていた。起き上がるうも体が重くて持ち上がらないのだ。

「道理で、俺の部下が放った拳銃弾を喰らって死なないわけだ。実に反則な技を使うんだな。だが、それは俺には通じんぞ。」禍風は自分の両手を見つめる「俺の力は、わが名の通り『風を制御する力』だ。貴様に放った『風剣』はまだ低レベルの攻撃でしかない。

それを、貴様の力で半減してこのざまなら、貴様には勝ち目などないぞ。」

信仁は舌をかむ思いで、禍風の方に顔を向けた。

（いったい、なんなんだよ。こいつ・・・）

信仁の頭には混乱が広がっていた。

（今までの奴らとレベルが違いすぎる。）

信仁は今までも、地元のチンピラやヤクザ。果てはマフィアなどと戦った経験を持つ。

その戦う理由は、今とそう大して変わらない。苦しむ人、弱き立場に立つ人を助けるため。

それだけのために、信仁は自らが持つ『不思議な力』を振るい戦ってきた。

しかし、今まで相手を倒してきたのは、相手があくまで『普通』の人間だったからだ。

こんな『超能力者』相手にまともにやりあうことができるはずがない。

「だから、なんだってんですか？」今のままではかなわないことはわかっている。それでも、自分の後ろに弱き立場に立つ人がいる以上、自分がやらなければならないことは決まっている。

「今の僕の力では、彼女どころか僕自身も守れない。そんなことわかってる。だけど、自分の理屈で、自分の勝手で、護ろうとした人の運命を放り投げるなんて・・・そんなことは絶対にできない！」それは禍風だけに向けられた言葉ではない、自分に向けた言葉でもあった。

弱気になりがちな自分の心を支えるためには、自分から心に刻んだ信念を再確認しなくてはならない。そのために自分にも言い聞かせることを心掛けているのだ。

「ふん、あくまでも立ちふさがるか。」再び上げられる両の腕「ならばけし飛べ、わが風と共に！」夜の空に禍風の声が凜と響く。「旋風斬！」声と共に禍風の両の手のひらからすさまじい旋風が吹き出る。

「本当は生きたまま捕まえて、サンプルにしたかったんだが仕方ない。どの道貴様程度の実力だったら、あえて捕獲する意味もない。よって・・・全力でつぶさせてもらう。」

禍風の手のひらの旋風はやがて巨大な剣の形を保ちだす。

「さて、最後の選択権を与えてやる。そこにいる女をこちらに渡して生き延びるか。それとも、あくまでその女を守って死んじまうか。」「信仁は唇をかんた「そんなの決まってる・・・たえ僕の命が尽きようとも、僕は最後まで自分の信念を曲げはしない！」

「そうか・・・なるほど・・・愚かな選択だな。ぼうず。」禍風は苦笑を浮かべる

「その感情は、『勇氣』とはいわないタダの『馬鹿の咆哮』だ。」
禍風の両手が動く

身構えた信仁に、禍風は最後の言葉を放った「俺以外の超能力者と会ったのは久しぶりなんで期待したんだが・・・とんだ期待はズレだったよ。」無造作に振るわれた禍風の両腕。

そこから放たれたふた振りの刀。それを視界にとらえるのが精いっぱいだった。

信仁の体は、上空に舞い上がった。体のあちこちが何かに切り裂かれていくような感覚の中、信仁は眼下の風景に目をやっていた。激痛が体中を駆け巡っているはずだ。だが神経が麻痺しているのか、その感覚がやってこない。

眼下では禍風と名乗った男がこちらを見上げている。表情はよく見えないが、おそらく笑っているのだろう。

だが、信仁の視線は、禍風だけに向けられているのではない、むしろ信仁が向けたかったのはたおれていた彼女の方だった。

だが、今頃になって激痛が体に回りだし、視界も薄れていく。（くそ・・・彼女だけでも今のうちに逃げられれば・・・）薄れていく視界、その端によろやく彼女をみつけた。だが・・・

（なえだろう・・・なんか違和感がある）その違和感の正体を信仁は知ることではできなかった。信仁の視界が完全に暗闇に覆われ意識がやみの中に沈んでいく。

（く・・・そ・・・）暗闇の中必死に伸ばした腕も届くはずもなく、信仁の意識は完全に消えていった。

信仁の意識がもう少しはつきりしていたら、違和感の正体を知れただろう。

なぜなら、彼が守ろうとしていた少女は『立ち上がって』いたのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8628n/>

グリム・リーパー

2011年10月7日02時00分発行